

青少年くらし

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

9月

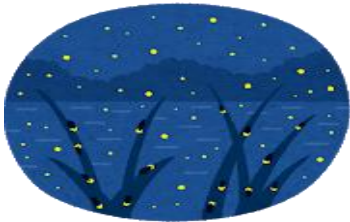


「子育て支援としての子どもの自然体験活動」

今回は、中国学園大学・中国短期大学 子ども学部 准教授 中田周作先生からお話を伺いました。先生は岡山大学教育学部を卒業後、九州大学大学院教育学研究科修士課程を修了されて現在に至ります。先生の趣味はバラエティーに富んでいます。妖怪から始まり、クラシックカメラ・散歩・万年筆・さらには岡山文化観光検定三級を有するなど、人生を心豊かに過ごしておられます。現在、先生は、放課後児童クラブ（Ⅱ学童保育）の実態や制度などを研究しておられます。

私は現在、教育社会学、子ども社会学を専門とする中国学園大学の教員で、保育士、幼稚園教諭、保育教諭、小学校教諭、放課後児童クラブの先生等を育てる仕事をしています。そして仕事の傍ら、子どもたちを対象とする自然体験活動を主催しているボランティア団体「わんぱく教室」にも携わっています。一九八一年設立以降、自然体験活動を開催してきましたが、昨年度以降は活動を控えてきました。しかし、コロナ禍が終息した折には、また活動を再開したいと考えています。「わんぱく教室」の参加対象者は小学校一年生から中学校三年生であり、高校生以

上がボランティアスタッフを務めています。近年は、春に百間川で水遊びをしたりホタルを見たり、夏に笠岡の白石島や高知県の四万十川に行ったり、秋には奈義町で化石の発掘体験をしたり、冬には鳥取県の日南町で雪の中で遊んだりしています。百間川のような都市部に近い自然環境でも、様々な生き物がいることを実感することが出来ます。また、白石島や四万十川では、とても雄大で美しい自然環境を



体感することが出来ます。奈義町の化石発掘体験からは、山に囲まれた場所がかつて海であったことを知ることが出来ますし、掘り出された化石をストラップにして、大自然を身近に感じることが出来ます。日南町では、岡山県南ではあまり経験することができない雪合戦やかまぐら作りなど昔ながらの雪遊びを体験することが出来ます。



多様な自然体験活動ですが、考えようによっては家族集団の機能の一部として位置づけることが可能で、しかしながら、自然環境には危険な要因も潜んでいます。既に保護者の世代があまり自然体験活動をしていないご時世ですから、そうした危険を自分たちが回避しながらも、子どもたち自身がその危険を回避できるようになることは困難です。子どもたちの生活環境に着目して、子どもの日常生活圏内に、身近に遊べる自然の環境は少なくなっていると思います。日頃から遊び慣れているとい



うことでもありません。それに昨今の子ども仲間集団の規模は小さく、同年齢化しているともいわれています。子どもたちが異年齢集団で遊ぶことは子どもの発達に必要ということだけではなく、年長の子どもたちから危険の回避を含む遊びのノウハウの伝承という観点から必要と言えます。その様なことを考えると、身近な地域社会の中に自然体験活動を専らとする地域集団が存在することは、多少なりとも有意義なことではないかと思っています。こういった地域活動を支えているのは、普通の学生たちや社会人たちです。学生は、私が授業を担当している中国学園大学子ども学部をはじめ、岡山赤十字看護専門学校、岡山済生会看護専門学校、岡山労災看護専門学校等の学生たちです。例えば、中国学園大学子ども学部の大学生たちは、子どもが大好きでとても優しい学生が多く、安心して子どもを任せられます。看護学校の学生たちは、テキパキとした学生が多く、本当に頼りがいがあります。参加する学生の中にはこのようなタイプが多いと感じるのです。社会人のスタッフは、それぞれの職務経験を活かした関わりをしてくれており、活動の質の

高さを保証してくれています。私も、子どもの頃に経験した身近な自然の中で遊ぶ楽しさを子どもたちに伝えていきたいと思い、細々とではありますが活動を継続しています。

しかしながら、ひとつのボランティア団体を運営していくとなると様々な困難に直面します。活動資金や人手は慢性的に不足していますし、時には人間関係がこじれてしまうこともあります。こじれてしまうと、その修復には大変なエネルギーを要します。何とかいい解決ができるように話し合いを続けます。そして、より良い関係づくりにもっていかうとさらに努力します。

困難が何ひとつない人生や活動などあるはずがありません。さらには学生生活や職業生活においても同様だと思います。活動に参加してくれているボランティアスタッフの皆さん

には、普段の生活の中では経験することができない、こうした地域活動に参加することで、より幅広い経験をしていただけだと思います。

ところで、岡山県には倉敷市少年自然の家(由加山)や岡山県渋川青年の家等があり、学校教育の一環

「かぼちやのデッサン」 鉛筆スケッチ

倉敷市立西中学校2年 原 百杏 (令和2年度)

形を描くのは難しかったですが、よく観察して光の明暗を意識し、より立体感をつけました。



としても自然体験活動に取り組みられています。学校教育におけるこの取組は、子ども一人あたりの回数こそ多くはないものの、ほとんどの子どもたちに自然体験活動の機会を提供できるという意味では大変に意義深いと思います。また、県内各地に存在するこうした社会教育施設等には、指導者が常駐していることも多



く、家族で利用した場合でも専任の指導者によるプログラムを経験することが可能です。さらに、こうした活動にも学生たちがボランティアスタッフとして参加している場合もあります。

この他に、現在、私が研究対象としている放課後児童クラブにおいても、今後、さらに自然体験活動を取り入れることができる可能性があるように思っています。放課後児童クラブは、一九九八(平成一〇)年に児童福祉法に位置付けられて以降、登録児童数が急増していますので、放課後児童クラブの活動に自然体験活動を取り入れていただければ、より多くの子どもたちが自然体験活動を体験することができるようになります。放課後児童クラブにおける育成支援の内容は、例えば小学校の授業内容と比較すると自由度が高く、放課後児童クラブの先生方の指導能力がクラブの質と深く関連しているように思います。放課後児童クラブの研究者は、まだまだ少ないのですが、放課後児童クラブの質的向上といった側面から、子どもの育ちを支えていくことができたかと考えています。実践的な側面からだと、倉敷市の放課後児童クラブに「わんぱく教室」が所有し

ているキャンプ道具等を貸し出しています。

自然体験活動だけに限った話ではありませんが、やはり人間には好き嫌があるものです。野外での自然体験活動も同様で、自然の中で遊ぶことが好きな子どももいれば、好きではない子どももいると思います。しかし、子どものうちに楽しい自然体験をすることによって、その楽しさを知っている大人が増えれば環境保全にもなりますし、なにより子ども自身の人生を豊かにする一助となることが期待できます。「わんぱく教室」に限らず、あなたの地域社会にも子どもたちの育ちを支える地域集団社会教育施設等が存在し、自然体験活動の機会を提供しています。

子育ては、親や保護者だけで行う必要はありません。そうしたグループや地域の活動を、あなたの子育てに活用してみてはいかがでしょうか。

(おわり)

